

研究ノート

国文学者と時局

—谷崎源氏の改訳から見る、戦中戦後の天皇表象と最高敬語—

大津 直子

同志社女子大学・表象文化学部・日本語日文学科・准教授

Literally researcher in the times:

Tanizaki-genji, expressions of the emperor, term of respect

OTSU Naoko

Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Culture and Representation,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Associate professor

(本学では合冊して所蔵されている)

一、はじめに

—『日本諸学振興委員会研究報告第三篇 (国語国文学)』

改元から二年、この間度々新元号の出版となった『万葉集』が話題に上った。文学研究の衰退が叫ばれる昨今にあつて古典文学が注目を浴びること自体は喜ばしいことではある。しかしながら「国書」というイメージばかりが称揚される状況に、一抹の不安を覚えたことも事実である¹⁾。

そんな思いを抱いていた昨年一月、京田辺キャンパスの図書館で一冊の資料を手にとった。昭和十二年(一九三七)十一月に開催された学会の速記録、『日本諸学振興委員会研究報告第三篇 (国語国文学)』である。日本諸学振興委員会は、所謂天皇機関説事件に端を發して発

足した官製学会である³⁾。昭和二〇年（一九四五）までの九年間、諸学の発展振興と教育の刷新に関わる事業を行った。全期間を通じて会員の存在しない異様なこの組織は、文部省の外局として成立した数学局のもとで学問統制の拠点となった。そして、国語国文学領域の委員に帝国大学の教授や学長が名を連ねる中、総帥として君臨したのが谷崎潤一郎訳『源氏物語』の校閲者、山田孝雄である³⁾。稿者は谷崎源氏研究を通して戦中の『源氏物語』研究の継承と断絶に関心を抱き、折も折この資料を探していた。本学が一般の出版物とも異なる戦前の速記録を所蔵していたことにまず大変驚いた。

二月に入り、日々刻々とCOVID-19いわゆる新型コロナウイルスへの危機感が社会全体を覆いつつあった。未知のウイルスという脅威との対峙は、一妥当であるかどうか議論があるものの一時に戦争に例えられる。してみればこの時局、日本が戦争に向かってゆく昭和初期の社会と重なる点があるのか。資料に導かれる心地がして、研究ノートの筆を執ることにしたのである。

二、更衣が参上したか帝が渡御したか

谷崎潤一郎は後半生に三度『源氏物語』訳を上梓した。一度目は昭和一四年（一九三九）一月から昭和一六年（一九四一）七月にかけて刊行された『潤一郎訳源氏物語』、通称（旧訳）である。出版元中央公論社は時局を鑑みて「国体明徴的のにおいをもった」校閲者を求め、山田に白羽の矢を立てた。加えて、訳文からは光源氏と藤壺の密通をはじめとした不敬箇所も取り除かれた。（旧訳）は周到な配慮を以て刊行されたのである。二度目は昭和二六年（一九五一）五月から昭和二九年（一九五四）二月にかけて刊行された『潤一郎新訳源氏物語』、通称（新訳）である。再度校閲を担当する山田に加え、玉上琢彌を中心とした京都大学グループが助力、ここで削除された場面が復活する。

三度目は昭和三九年（一九六四）一月から昭和四〇年（一九六五）一〇月にかけて刊行された『潤一郎新々訳源氏物語』、通称（新々訳）である。現代仮名遣いを採用した（新々訳）は、現在文庫本などでも流布している。ただしこの時は編集部が主体となり谷崎の死を挟んでも滞りなく刊行が続いた。したがって谷崎の仕事という意味では（新訳）を事実上の決定稿と位置付けることができる⁵⁾。

本稿が焦点を当てるのは「桐壺」巻の一場面の解釈である。まずは谷崎が訳出に使用した『湖月抄』（文献書院、大正一五年版）本文を引く⁶⁾。

御つぼねはきりつぼなり、あまたの御かたぐい¹⁾をすぎさせ給つゝ、ひまなき御まへ²⁾わたりに、人の御ころをつくし給もげにことはりとみえたり、まうのぼり給にも、あまりうちしきるおりくは、問題は傍線部（A）「すぎさせ給」ふの主語である。戦前は更衣が清涼殿へと参上する説（以下「更衣主体説」と、帝が桐壺へ渡御する説（以下「帝主体説」と）があったが、現在は後者が定説となっている。昭和二六年（一九五一）の「後記」を持つ北山谿太『源氏物語の新研究 桐壺篇』（武蔵野書院、引用は昭和三十一年（一九五六）復刻版）を見てみよう。

御方々を過ぎさせ給ひつつ「御方々を過ぐ」は、女御更衣達の局の前を通る意。この語の主語を桐壺の更衣と見る説もあるが、やはり帝と見るのが、正しい。第一には、更衣と解しては、下の「まうのぼり給ふ」と重複することになるし、第二には、作者が、この更衣に対して、崇敬の意味の「させ給ふ」や「せ給ふ」を、地の文に用いた例がないからである。

更衣主体説には傍線部（B）の動作と重複してしまうという文脈上の問題と、地の文では更衣に対して用いられない最高敬語（二重敬語）が付されているという語法上の問題がある、と北山は指摘する。いずれも首肯されるが、とりわけ後者の根拠は動かし難い。中古文学作品

において敬語は人物の身分によって機械的に付与されており、最高敬語が地の文で遇される場合、通常主語は帝、后に限られるからである。後述するが、最高敬語という概念が初めて提唱された場合は、他ならぬ昭和十二年（一九三七）開催の日本諸学振興委員会第一回国語国文学会であった。「やはり」という北山の言葉から、最高敬語に依拠した帝主体説が定着しつつあることがうかがえよう。しかし、谷崎源氏では〈旧訳〉はもとより〈新訳〉においても更衣主体説が貫かれた。

〈旧訳〉更衣のお部屋は、清涼殿からは遠く隔つてゐる桐壺なので、お上りになるには、是非共大勢のおん方々の局々の前をお通りにならねばならない。されば、かうしきりなしにお召しがあつては、朋輩方が忌ま忌ましくお思ひになるのも尤もであつたが、さう云ふ中を出仕なさるにも、それがあまりに度重なる折には、

〔新訳〕更衣の局は桐壺なのです。されば、お上りになりますには、是非とも数多の局々の前をお通りにならねばなりません。それがかうしきりなしでは、朋輩方が忌ま／＼しうお思ひになるのも、まことに尤もと申さねばなりません。お上りになることがあまりしげ／＼と度重なる折々には、

〔A〕「すぎさせ給つゝ」に該当する箇所、〈旧訳〉「お上りになるには」、〈新訳〉「お上りになりますには」とあり、いずれも桐壺から清涼殿へ更衣が参上する意で訳されている。そのため北山の指摘通り〔B〕と内容が重複し、訳文はいささか不自然なものとなっている。

さて、一見些細な事実から本稿は一体何を問おうというのか。注目されるのはこの箇所山田の極めて強い意向が働いたという事実である。後年玉上が発表した回顧録^⑤には、次のようなくだりがある。

聞くところによると、山田博士の書き入れがあると、（大津注・谷崎は）必ず多少なり手を入れられたさうである。桐壺の巻「あまたの御かた／＼を過ぎさせ給ひて、ひまなき御まへ渡りに、人の御心を尽くし給ふも、げにことわりと見えたり」の「ひまなき

御まへ渡り」を旧訳では更衣の伺候とするが、タイプ原稿では主上のお通りになおしてあつた。

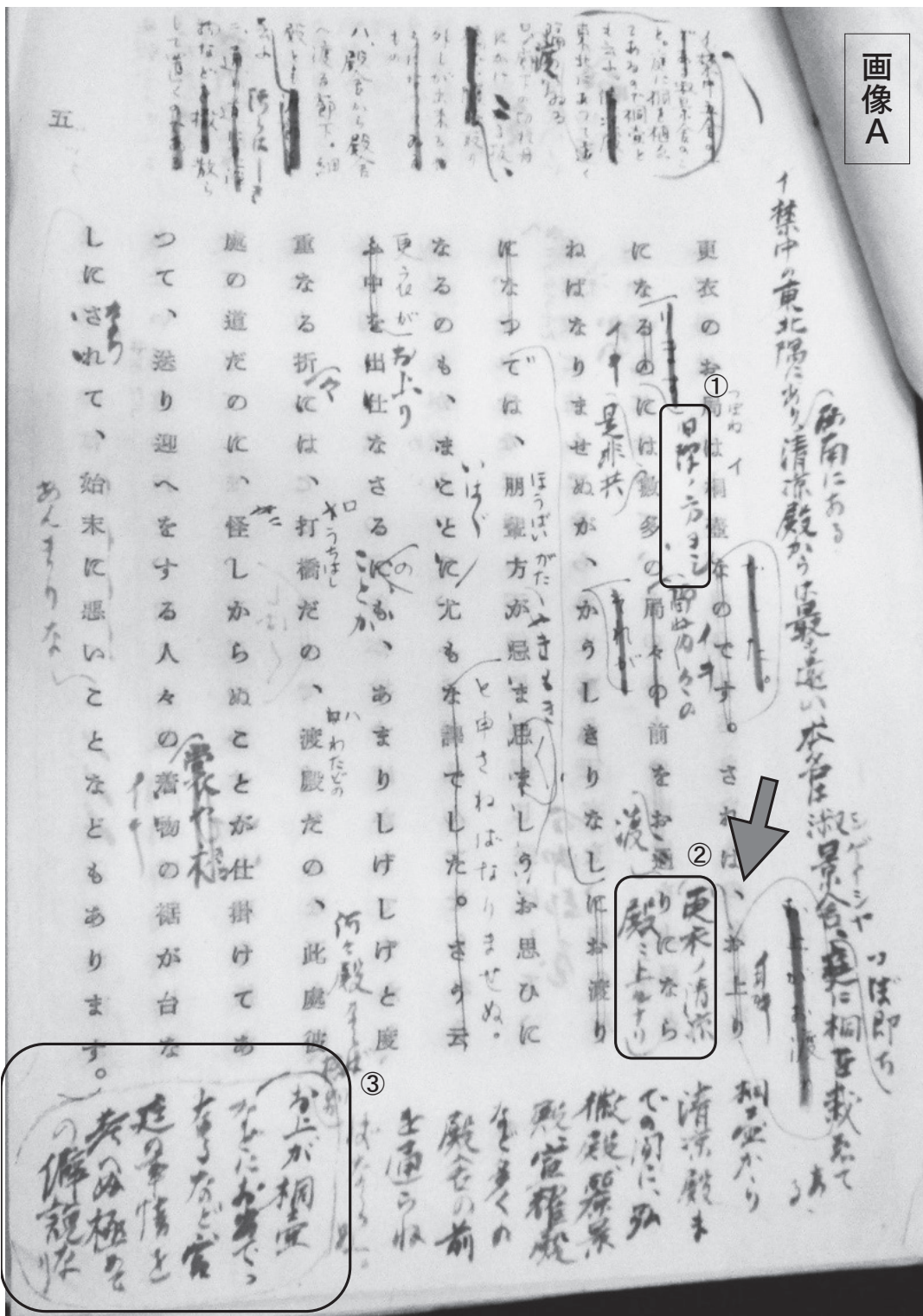
それが印刷され刊行されたのを見ると、もとの更衣伺候説に戻つている。おどろいて何うと、山田博士がタイプ原稿に長い書き入れをして来られたので、ということであつた。

玉上によると、〈新訳〉の生成段階において谷崎は一度帝主体説に変更しようとしていた、しかし山田の校閲が入り更衣主体説が維持されたのである。右の証言は、直接対面することなく進められた改訳の工程をほぼ完全に留める〈新訳〉の草稿^⑥によって裏付けることが出来る。

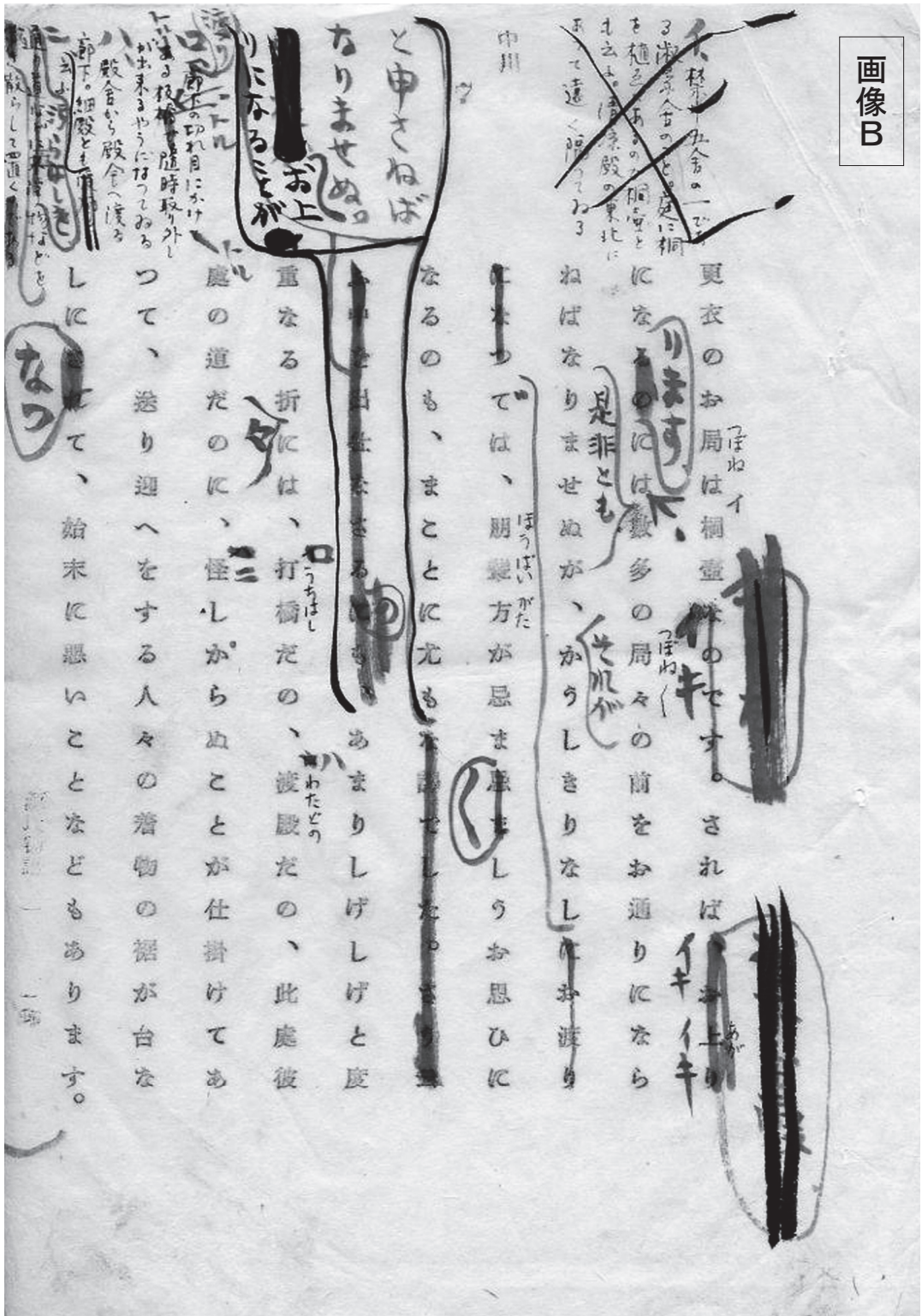
次頁画像Aは〈新訳〉第一稿にあたるタイプ原稿に入った、山田の校閲である（矢印、枠線は稿者挿入）。矢印の箇所一行目から二行目にかけて訳文は「お上りになるものには」とある。傍記は山田の手に渡る以前に入っていたものである。山田の朱筆がそれを削除、修正しているからである。確かに訳文は一旦帝を主語とするものになつていく。だから山田は「お上り」すなわち更衣が参上する解釈を「イキ」とし、行間に①「旧訳ノ方ヨシ」、②「更衣ノ清涼殿ニ上ルナリ」と訂正を入れたのである。注目したいのは、左下の欄外の書き入れ③である。「お上りが桐壺などにお出でになるなど、宮廷の事情を考へぬ極めての僻説なり」——これは作業全体を通して異例の厳しい叱正と言える。

校閲に接した谷崎の草稿が画像Bである。谷崎は最初に朱筆で加筆し、追つて墨書きで修正、再度朱筆で書き入れをしている。墨書きで塗りつぶされた箇所には「お上がお渡り」と書かれていたと推定される。〈旧訳〉の本文をイキとし、帝主体説を撤回、逡巡しながら最終的に山田の意向を尊重したことがわかる。改訳の時期は昭和二十六年（一九五二）三月初旬である。山田はなぜ学術的根拠によって斥けられたあつた更衣主体説を強硬に主張し続けたのか。何より興味深いのは、

画像 A



画像B



昭和一二年（一九三七）、山田本人が最高敬語の提唱された場に居合わせていたことである。（御前わたり）改訳の顛末には、何やら因縁らしきものが横たわっているらしい。乃ち、戦中戦後で一転した天皇表象の問題である。

三、戦時下の敬語論

玉上は昭和二七年（一九五二）に発表した論文「敬語の文学的考察」で次のように言及している。¹³

〔三 最高敬語（中略）宮田和一郎先生が、「平安朝時代の敬語とその語法」（『日本諸学振興委員会研究報告第三篇 国語学国文学』）で、最高敬語と呼んでいられるものである。すなわち「宣はす・賜はす・仰せらる・仰せ給ふ・―せ給ふ・―させ給ふ」を―特に示していられる。

最高敬語は、宮田和一郎が日本諸学振興委員会第一回通常学会において提唱した術語であるという。前掲速記録によれば、宮田は大阪高等学校教授の肩書で、「平安朝時代の敬語とその語法」という発表を行っている。同会は三日に亘り三九名の研究発表と三名の講演が行われた。東京帝国大学教授久松潜一、京都帝国大学教授澤瀉久孝ら錚々たる顔ぶれが研究発表者として登壇する中、山田が講演者として掉尾を飾っていることは注目に値しよう。¹⁴ 発表内容は言葉の用例分析から思想を論じるものまで多岐にわたる。各題目を概観すると、「日本」が八回、「国文学／日本文学」が各四回、「精神」が四回、「国語」「国民」が各四回用いられており「日本精神」を強調する言葉が並ぶ。作品名は、『万葉集』（含『萬葉』）が二回、『風土記』『枕草子』、『源氏物語』、『雨月物語』が一回ずつ掲げられている。他方、目立つのは敬語（「敬語」三回、「敬語」一回）を題目に掲げた発表である。なぜこの時期、敬語に注目が集まったか。語法的に最も整理されていると断

りを入れた上で『源氏物語』の敬語を分類した、宮田の発表の次の箇所に注目してみたい。

最高敬語

一、用語 宣はす 賜はす 仰せらる 仰せ給ふ ―せ給ふ ―させ給ふ

（中略）

次は最高敬語であります。是は斯う云ふ項目を設けたのであります。併し文学法学的に見ると、何等意味のないものであるかも知れませぬ。併しながら語法学的に之を見ますと、常に此点に留意して文義を決定して行かねばなりません。是は敬語の敬語たる所以でありまして、是は又序説に書いてあります通り、うるはしき我が国民精神に根拠を有つものであります。

右が最高敬語の提唱された瞬間である。重要なのは傍線部、最高敬語と「うるはしき我が国民精神」とが結びつけられている点である（序説）とはこの発表の冒頭部分を指すが、速記録には「序説 敬語の発生 一、皇室尊崇の国民的至情 二、敬神思想 三、相互敬愛の情」という見出しのみが掲げられている。宮田は最高敬語が国民の皇室への尊崇の気持ちから生じたものだと主張している。右に先行する箇所には「此会の第一日に春日さんがお話になりました其特異なる我が国民精神」というくだりも出てくる。「春日さん」とは「日本の敬語について」という発表をした九州帝国大学教授春日政治である。春日は漢文の書き下しに敬語が添加されることを指摘した上で次のように述べている。

かくて我が敬語が多く君臣関係より発生してゐることは、語源的に考へて争はれない事実であつて、従つて我が国語の一大特質たる敬語は皇室を中心とした国体の特質から発達してゐるやうに考へられます。（中略）しかしかく高度に敬語を発達せしめてゐる点の、我が国語の特徴である以上、我が天皇の尊厳と

之に対する臣民の随順とかいふものが、他国と大いに違ふことを表してゐるわけでありあます。

敬語は「我が天皇の尊厳とか之に対する臣民の随順」から発露した「皇室を中心とした国体の特質から発達」したものである。春日の主張は語法分析から飛躍したものと言わざるを得ない。敬語が国粹主義や皇国思想の根幹を支えるものであったことがわかる。国文学界のこうした空気と呼応する形で、一般社会における皇室敬語も次第に厳格化されていった。官製学会において提唱された最高敬語は、古代の「臣民」が天皇を尊崇した証拠として国粹主義を補完したと思しい。

昭和二七年（一九五二）四月一四日、国語審議会が文部大臣宛に「これからの敬語」を提出する。この文書を以て皇室敬語も「普通のことばの範囲内で最上級の敬語」として「平明・簡素」化が図られ、戦前の方針は一新されることとなる。

四、近代注釈における〈御前渡り〉

以上の経緯を踏まえ、今一度〈御前渡り〉に視点を戻したい。実は近代の一時期、現代語訳や注釈が一樣に更衣主体説に傾くという現象が認められる。というのも、『湖月抄』頭注は異説があることを指摘しつつも帝主体説を採っているのである。

ひまなき御まへわたり 更衣の局へ帝のおはして御方ノ前の前をとをり給ふ也（今一説略之）

「今一説略之」とは、更衣主体説のことであろう。江戸期には最高敬語という概念は存在しない。『湖月抄』は「すぎさせ給ふ」、「まうのぼり給ふ」という動作が重複することから、素直に前者を帝の、後者を更衣の動作と取っているであろう。ところが明治以降解釈は一転する。以下、谷崎が参照した訳、諸注釈を見てゆこう。まず注目するのは、明治四五年（一九一二）初版刊行、与謝野晶子『新訳 源氏

物語』である。

桐壺と云ふ御殿は内裏の東北隅にあつて、陛下の御居所の清涼殿は西南にある御殿であるから、更衣が宿直に上つたり朝になつて下つて行つたりするのには多く女御更衣達の住んで居る御殿御殿の縁側や廊下を通らねばならないのである。

晶子『新訳』は自由訳を謳っており原文に沿う文脈にはなっていない。ただし傍線部の表現から更衣主体説と知られる。また、大正一四年（一九二五）初版発行、頭注と原文とで構成された金子元臣『定本源氏物語新解』は「間断なしの御伺候に人々がやきもき思ふのも」という頭注を付す。「御伺候」とあるからやはり更衣主体説である。昭和三年（一九二八）初版刊行、吉澤義則を筆頭著者とし宮田、春日が訳者の一人として名を連ねる『全訳源氏物語』（文献書院 一―四頁）は次のように訳している。

御局は桐壺にあつた。その隔つた御局から、数多い御方々の御部屋の前を過ぎて、清涼殿へ、日毎夜毎、絶間もない往来を見せつけられては、寵衰へた方々が気を悪くするのも無理ではない。

それでこの参殿の往来も、あまり頻りに引続くときは、……

「清涼殿へ」とあることから、やはり主体は更衣である。最高敬語の提唱に先立つ時期ではあるものの、宮田の携わった訳が更衣主体説を採っていることは興味深い。昭和五年（一九三〇）初版刊行、島津久基『対訳 源氏物語講話』にも注目したい。

この更衣の御部屋は桐壺であつた。陛下の御座所の清涼殿からは、かなり離れてゐるので、多くの女官方の部屋々々の前を御通りになつては、ひつきりなしに渡らせられると、その度に「またか」とみんなの女官達が気を揉まれるのも、全く無理のない処と言つてみたくもなる。左もない時は更衣をば、今下がられたかと思ふと、又直ぐのお召しで、余り続けざまに上られる時などは、……

島津は「上がる」や「御伺候」という表現を用いておらず、更衣主体説とも帝主体説とも解釈できる。現在把握している谷崎が参照した主な諸注釈は以上だが、最高敬語が提唱された後も依然として戦前の諸注釈、現代語訳では更衣主体説が採られている。帝主体説に切り替わり更衣主体説を併記しなくなるのは、管見では昭和二十一年（一九四六）初版刊行、朝日古典全書『源氏物語』²³が早い。敗戦の次年に解釈が変更される、この現象には刮目すべきである。

ポイントがこれが帝のふるまいであるかどうかであったらう。稿者は以前（旧訳）で削除され（新訳）で復活した約四六〇箇所を調査し、皇統乱脈に関わらない文脈についても多くの削除が存在していること、帝の心情や言動についても訳出されなかった箇所が存在することを明らかにした。今般参考になるのは次の朱雀帝の描写である。

「大臣はお亡くなりになり、大宮も頼み少くならせられるばかりだのに、私の余命も何程もない心地がしますので、お気の毒ながら、昔に変わる有様でお残りになることでせう。あなたは前からあの人以下に私を見縊つておいででしたが、私は自分の愛情は何人にも勝ると思つてゐますので、一途にあなたのことだけが気にかゝるのです。いつかお望みどほりになつて、あの私以上の人が、あなたのお世話をなさるやうになるとしても、志の深さと云ふ点では、くらべものにはなるまいと思ふさへ辛くつて」と仰せになつて、お泣きになります。（中略）「どうして、せめて御子をでも生んで下さらないのでせうか。残念なことです。宿縁の深い人のためなら、すぐにもお生みになるだらうと思ふと、くやしいのです。でもあの人の子では身分に限りがありますから、尋常人で過すことになりませぬ」など、行末のことまで仰せられますので、耻かしくも悲しくもお思ひになります。

（新訳）三卷九二〜九三頁

「澤標」巻、朱雀帝が讓位の決意を固め、愛妃臙月夜に対して未練

を口にする場面である。「あの人」とは臙月夜が秘かに慕う弟光源氏を指す。前半傍線部で、朱雀帝は弟と比較して自分が見くびられていゝる、と臙月夜をなじる。さらに後半傍線部では、皇子が生まれなかつたことに落胆し、光源氏との間の子が生まれたとしても所詮ただ人の子だと侮蔑と嫉妬の感情を口にするのであった。右は（旧訳）では全て削除されている。愛妃への執着を吐露する帝像、自身がただ人に劣つていゝると認め嫉妬する帝像が、皇国史観に抵触するものであったからであろう。（御前渡り）の解釈が一時更衣主体説に傾いたのも、更衣程度の女性の許に足しげく通う帝像を許さない天皇表象に関する強いバイアスによるものと考えられる。

昭和三〇年（一九五五）（新訳）の愛蔵本刊行の折、玉上が山田に直談判したことによって、（御前渡り）の解釈はようやく変更される。玉上はその時のことを次のように振り返つていゝる。²⁴

山田博士は、中国の皇帝は女の所に行かれることはない、とも書き入れていられたとも聞く。中国のことから延いて日本のことを考えられたのかも知れない。平安時代の後宮殿舎の使い方は、後世とも遠い中国とも違うようで、ほんとうは議論にならなかつたので、よく許して下さつたことだと思ふ。

「書き入れていられた」とは、前掲タイプ原稿への校閲を指す（画像A・玉上は未見）。山田の主張通り、格式の低い桐壺への頻繁な渡御は帝の正常なるふるまいではない。むしろ物語は、（御前渡り）を通して、帝の偏愛の異常さ、ひいては道理や掟を逸脱して一人の女性を愛してしまう人間らしさを描いているのである。それは天皇を神格化する時局では決して是認されるものではなかつた。昭和二〇年（一九四五）、敗戦と同時に数学局が廃止され、次年山田は公職追放となる。そうした体験を経てもなお一貫して更衣主体説を堅持した態度の背後には、思想の転向を拒絶する矜持があつたのではないか。²⁵

本稿が取り上げたのは解釈の変遷の一通過点に過ぎない。ただし看

過できないのは、学術的発見が国粹主義を補完する論理へと回収され、宮田の発表から約十年の間、物語の象徴的な場面の読みが更新されなかったことである。穿った見方をすれば、この箇所^⑧の最高敬語は更衣のふるまいと捉えるために意図的に見過ごされた可能性もある。なぜならば、戦後刊行された注釈書が立ちどころに帝主体説へと修正→転向してゆくからである。昭和二十七年（一九五二）、玉上が論文の中で改めて敬語について取り上げ、宮田論に言及したことは重要である。日常生活の敬語が平明化されてゆく時局において、戦前のイデオロギーを排してもなお、最高敬語が創見であったことを研究史上に位置づける意義があったと言えよう。^⑨

五、おわりに

学問領域の自立性、大学の自治→今年四〇になる稿者は、何の疑いもなくこれらが永続的に存立するものと信じてきた。昨年十月、政府の学術界への介入を目の当たりにし、それが誤りであったことを思い知らされたのである。代表委員として関わる学会が声明を出すにいたり、稿者の実名も連ねてよいかという問い合わせが来た。学者はいかなる時局においても超然としていなくてはならない、と言うのはたやすい。しかし、あの折に感じた公権力に向けて異論を表明することへの重苦しい気持ちは生涯忘れることはないだろう。

明治以来の欧化政策を経て（純日本的なるもの）を盲目的に追求める戦時下は、国文学界にとってアカデミズムの中のプレゼンスを高める絶好の機会でもあったという^⑩。戦前の国文学界の動向は、文系軽視の風潮や古典不要論が声高に叫ばれる現況とどこか重なってはいまいか。日本諸学振興委員会を巡る学者たちの活動は、国家と各学問領域との関係性を考える上で、今を生きる我々に示唆を与えてくれるはずである。速記録が残されたこと、それが破却されずに保全されて

いたことに、改めて感謝したい。

文章は経国の大業——記録は大事である。

注

- (1) 「国書」「国文学」の概念規定については品田悦一・齋藤希史両氏の『国書』の起源 近代日本の古典編成（新曜社 令和元年（二〇一九））を参照されたい。
- (2) 駒込武・川村肇・奈須恵子編『戦時下学問の統制と動員 日本諸学振興委員会の研究』（東京大学出版会 平成二十三年（二〇一一））。
- (3) 山田は昭和二〇年（一九四五）六月開催の最後の学会においても神宮皇學館大学長の肩書で発表を行っている（注（2） 同書六八頁「附表七 各学会発表者・発表題目一覧」）。
- (4) 雨宮庸蔵「谷崎潤一郎—壁面風のデッサン」（『偲ぶ草 ジャーナリスト六十年』中央公論社 昭和六三年（一九八八） 一九頁）。
- (5) 詳細は拙稿「二つの谷崎源氏—國學院大學蔵『潤一郎新訳 源氏物語』草稿より見る一考察—」（『文学・語学』第一九六号、平成二十三年（二〇一一）二月）、「文体を一新する—戦後の国文学者たちと谷崎源氏の交渉」（『国語国文』八九—七号、令和二年（二〇二〇）七月）に譲る。
- (6) この点については稿を改めたい。以下、引用文には適宜傍線や点線、傍点を付した。
- (7) 「最高敬語」（小田勝『実例詳解古典文法総覧』和泉書院 平成二十七年（二〇一五） 五五七頁）。
- (8) 玉上琢彌「谷崎源氏」をめぐる思い出（下）（『大谷女子大國文』第一八号 昭和六三年（一九八八）三月）。
- (9) 改訳の詳細は注（5） 拙稿参照。
- (10) タイプ原稿には頭注が入れられないため、（おそらく編集者が）手書きしていた。このタイミングで加筆されたものと推定される。
- (11) 谷崎のタイプ原稿には「お上りお上がお降りになるものには」という傍記がない。こ

から推測すると、まず谷崎がタイプ原稿を落筆、「お上がお渡り」¹⁾りま
す」と朱筆で訂正を入れタイプ原稿本文を帝主体説に変更、第三者がそ
れを山田、玉上に送付するタイプ原稿に転記という順番になる。山田の
校閲が返送された後に谷崎は自身のタイプ原稿に再度墨書きと朱筆で書
き入れをし、更衣主体説に戻したようである。

(12) 注(5) 拙稿参照。

(13) 初出・『国語国文』第二一二号 昭和二十七年(一九五二)三月、のち『源
氏物語研究 源氏物語評釈別巻二』(角川書店 昭和四一年(一九六六)
一五六頁)。

(14) 駒込氏も橋本進吉、時枝誠記ら東京帝大教授を抑えて山田が国語学領域
の常任委員の地位を占め続けたと指摘する(注(2) 同書四六一頁)。

(15) ただし、敬語を扱う発表四本のうち他二本は国体論への言及はなく、用
例検討に徹している。学会発足の初期には会の趣旨に忠実であろうとす
る者と距離を取ろうとする者がいたという(注(2) 同書四七五頁)。

(16) 戦後、新村出は皇室敬語が「厳酷な、圧制的な、制裁的な、懲罰的」な
統制を受けたと戦中を振り返っている(「敬語の将来」初出・昭和二六
年(一九五二)一月『中央公論』、のち『新村出全集』第三卷 筑摩書
房 昭和五二年(一九七七)三六八頁)。

(17) 文化庁ウェブページ「これからの敬語 十一 皇室用語」
(https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kakuki/01/tosin06/index.html) 閲覧日 令和三年(二〇二二)二月
一日)

(18) 注(17) 文書には昭和二二年(一九四七)八月段階で「当時の宮内当局
と報道関係」の間で新たな方針が共有されていたとも記されている。こ
うした動静は、「旧訳」の過分な敬語を削除した(新訳)の改訳方針に
影響したと考えられる(注(5) 拙稿)。

(19) 谷崎が参照した訳、諸注釈は、以下に基づき推定した。昭和九年(一九
三四)二月一六日中央公論社社長宛の書簡(水上勉・千葉俊二『谷崎先

生の書簡 ある出版社社長への手紙を読む 増補改訂版』中央公論新社
平成二〇年(二〇〇八) 一〇七〜一〇九頁、谷崎松子『源氏』と谷
崎潤一郎と私(『婦人公論』昭和四〇年六月号、のちに『銀の盞』倚
松庵の夢(中公文庫)、西野厚志『谷崎源氏・山田孝雄旧蔵』定本源氏
物語新解』対照表(『古代中世文学論考』第一八集 平成二八年一〇月)。
引用は『鉄幹晶子全集』第七卷 勉誠出版 平成一四年(二〇〇二)に
依る。

(21) 引用は昭和四年(一九一九)の十五版(明治書院、四頁)に依る。

(22) 引用は昭和五八年(一九八三)復刻初版(名著普及会、二八頁)に依る。

(23) 一例を掲げると、昭和一三年(一九三八)初版刊行、山口愛川『新譯源
氏物語』(大洋社出版部 二頁)には「更衣の局即ち桐壺は、弘徽殿、
麗景殿、宣耀殿などの女御の局の下にあつたから、帝の常の御座所なる
清涼殿に上るには、どうしても是等の局の廊下を通らねばならなかつた」
とある。また、昭和一九年(一九四四)初版刊行、頭注と原文とで構成
された麻生磯次『註釈源氏物語』(至文堂 九頁)は、「ひつきりなしの
御伺候」という傍注、「ひまは時間の透き間を云ひ、ひまなしはひつき
りなしの意である。前あたりは清涼殿へ御伺候する為に部屋々々の前を
御通過なさることを云ふ」という脚注を付す。

(24) 第一巻の頭注「帝が多くの後妃方の御殿を通られてひつきりなく桐壺に
お向になるので、人が気をもまれるのも成程尤ものと見えた」。
(25) 『國學院大學蔵』潤一郎新訳 源氏物語『草稿山田書き入れ旧訳本本文
加筆箇所対照表』(『國學院雑誌』第一一〇—一八号平成二二年(二〇〇九)
八月)、ならびに注(5) 拙稿。

(26) 注(8)と同じ。

(27) 谷崎は山田の人柄を「いかにも古への平田篤胤などに見るやうな国土の
風があつた」と記し追悼している(「あの頃のこと」(初出・昭和三三年
(一九五八)五月一四日発行『週刊朝日』、のち『谷崎潤一郎全集』第
二三卷 中央公論新社 平成二九年(二〇一七)三月 四七二頁)。国

学の四大人の一人に装える言葉からは、信条を貫いた生涯への敬意を説き取るべきであろう。

(28) 注(2) 同書四五八頁。

※本稿における引用は固有名詞以外の旧字を新字に改め、適宜傍線や点線等を付した。

〔付記1〕 本稿はJSPS科研費 20K00327 ならびに二〇二一年度同志社女子大学奨励研究助成金による研究成果の一部である。

〔付記2〕 執筆にあたっては國學院大學吉田永弘教授よりご教示を賜わった。

〔付記3〕 コロナ禍で草稿の閲覧調査の叶わぬ中、國學院大學図書館の古山悟由氏に多大なご高配を賜った。

〔付記4〕 本稿で扱った速記録は安田武人教授旧所蔵寄贈資料の一部である。閲覧にあたっては京田辺図書館横田氏、今出川図書館藤本氏をはじめとして両キャンパス図書館の多大なご助力を得た。

本稿を執筆するにあたりお世話になった全ての方に厚く御礼申し上げます。